
結論は殺人 その2

青木弘樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

結論は殺人 その2

【Nコード】

N9337T

【作者名】

青木弘樹

【あらすじ】

この物語の主人公は最終的に人をひとり殺めてしまう。なぜ？誰を？答えは最後に分かるだろう。

作：青木弘樹

翌日。

「ちよつと、あれなんだよ親父！」

雄二が怒鳴った。

「……」

雄一は寝ていたが、目を覚ました。

「またぶつけやがったな！」

「……」

雄一は眠い目をこすりながら、上半身を起こ上がらせた。

「いい加減にしろよ親父！」

雄二は怒っていた。車のバンパーが凹んでいたのだ。やったのはおそらく雄一だろう。

「朝っぱらからうるせえな……」

「もう昼だよ！どうしてくれるんだよ！」

「しょうがねえだろ！人間誰だってミスはあるんだよ！」

「ふざけんな！人の車に……」

「分かったよ……」

雄一はタンズから何かを取り出そうとしていた。

「ほら、これで直しいいだろ」

雄一は5万円を雄二に差し出した。

「……」

「ほら。受け取れよ。足りなかったらまた出してやるよ」

「……」

謝罪の一言もない。雄二は内心怒り狂っていた。が、こいつには何を言っても無駄だ。そう思った雄二は金を奪うように受け取り、

自分の部屋へ戻っていった。

そして数分して車に乗り込み、荒々しく走り去った。

「バンパー凹んだくらいで、うるさいやつだな、まったく」

雄一は反省の色がまったくなかった。

「ふざけやがって、クソ親父が…」

ぶつぶつ言いながら、車を走らせる雄二。だが彼は車を修理には出さなかった。そして受け取った5万円は思いつきり無駄遣いしように心に決めた。

雄二はパチンコに行った。実は生まれて初めてのパチンコだった。

「よし…」

雄二は打ち始めた。千円、二千元、五千元…順調(?)に負けていく雄二。こんなことをしても無意味だが、雄二は頭に血が昇っていたのだ。

「もつと無くなれ…」

雄二はつぶやいた。しかし、

「ん？」

画面に映る数字が揃ったようだった。

「な、なんだ!？」

画面が派手に光り出した。

「あれ?あれれ…??」

結局、雄二は3万ほど勝ってしまった。いや勝ったほうがいいのだが、しかし不本意だった。

「ビギナーズラックってやつかな…」

しかし冷静になって考えたら儲けたんだからいいに決まってる。

雄二は少しでも気分が晴れた。

雄二は買い物に行くことにした。特に欲しいものはないのだが、いろいろ見て回り、Gパンと靴、そしてCDを買った。そして美味しいと評判のラーメン屋に行き、最後に缶コーヒーをひと箱(30本入り)買った。親父の意見なんてクソ喰らえだ。もう人の言うこ

とを聞くのはうんざりだ。貯金も少しあるし、そのうち家を出よう。そう考えていた。

「さて、帰るか」

雄二が車に乗ろうとしたとき、若い男性が声をかけてきた。

「ちよつとあんた」

「はい？」

「なあ、いきなり悪いんだけどさ」

「…」

「缶コーヒー1本くれないかな？」

男性は同じ年くらいだろうが、笑顔で、気さくだった。

「え？」

「そのダンボール、コーヒーでしょ？1本だけでいいからめぐんでくれないかな？」

「…」

雄二はなんとなく、あのホームレスとのやりとりを思い出した。

「実はさ、俺、占い師なんだよね。まあ本業は違うけど。コーヒーくれたら一回だけタダで占ってあげるよ」

「…」

雄二は占いなど興味なかった。が、なんとなく面白そうなので話に乗ることにした。

「分りました。いいですよ」

「ほんとに！サンキュー！君はいい人だ」

雄二はダンボールから缶コーヒーを1本取り出し、男性に渡した。

「ありがとう。じゃあこれ」

男性は雄二に名刺を渡した。

「ちなみに今日はやってないから。明日来てよ。夕方5時からやってるからさ」

「分かりました」

「あんた、名前は？」

「木ノ本雄二です」

「オツケー、雄二さん。ほんとにありがとう。じゃあ待ってるよ」
男は笑顔で別れを告げ、自転車で去っていった。

「…」

雄二は変な奴だと思いつつも、あまり気にせず名刺をしまい、家に帰った。

翌日。

雄二は占い師だという男性からもらった名刺を見ていた。

「ふうん…」

こう書かれていた。占い師・L。通称・運のいいやつ。

住所も書かれていた。電話番号は書いていなかった。右端に自分が考えたであろうオリジナルのマークが書いてあった。

「Lねえ…。漫画のキャラみたいだな」

そして夜7時ごろ。雄二はとりあえず行ってみた。

「えと…」

そこには一件の喫茶店のような建物があった。窓から薄明かりがもれていた。

「住所はここだけ…」

入口のあたりに近づくと”Lの館”という表札があった。

「たぶん、ここだな」

雄二は入ってみた。

「あの、すみません」

薄暗い店内。カウンターがあり、テーブルも数台。どうやら元・

喫茶店という感じがした。

「いないのかな…」

雄二がキョロキョロしていると、

「やあ。よく来てくれたね」

昨日、出会った男性が現れた。スーツを着ていた。赤い色眼鏡もかけていた。

「…」

店内の薄暗さといい、雄二は少しだけ警戒した。

「木ノ本雄二さんだね。待っていましたよ」

「ど、どうも」

しかし話し方や仕草は昨日と一緒だったので少し安心した。

「まあ、かけて」

「ええ…」

雄二はカウンターの席に座った。

「さて」

男性はカウンターの下から何かを取り出そうとしていた。雄二は水晶玉でも取り出すのか？と思ったが、男性はコーヒーカップを取り出し、カウンターに置いた。

「…」

カップの中にはサイコロが入っていた。

「さてと…あなたは最近、不幸なことがありましたね？」

男性「エルは唐突に聞いた。

「え？え、ええ…まあ…」

「やはり。つとその前に、あなたの誕生日は何月何日ですか？」

「えつと10月10日です」

「10月10日！？ほんとに!？」

エルは驚いていた。

「ええ、そうですけど…」

「俺と一緒にだ。すごい偶然ですね」

「そ、そうですか」

雄二は占いなど経験はないが、なんとなく占い師らしくない言動に違和感を感じていた。もっとこうミステリアスというか、重苦しい感じだと思っていたからだ。

「なるほど、これも何かの縁かもしれませんね」

「はあ…」

エルはひとりうなずいていた。

「それでと…おそらく金銭的にはあまり困ってないように見受けら

れる。人間関係かなにかで困ってるのでは？」

「ま、まあそうですね…」

雄二は少しだけ驚いた。当たっているからだ。

「人間関係難しいよねえ。職場の上司と折り合いがつかなかったり」

「…」

「家族と折り合いがつかなかったり」

「そうですね…」

雄二はつぶやいた。

「今は人間関係で悩んでいる人、ほんとに多いですよ」

「そうですね」

「親とうまくいってないとか？」

「ええ、まあ」

「なるほど…」

しばらくエルは黙っていた。

「よし。ではこのサイコロを振ってみましょう」

「？」

「あなたにとつてのラッキーナンバーを決めるんです。さあ」

エルはカップに入っていたサイコロを雄二に渡した。

「…」

雄二はサイコロを振った。出た目は4。

「よし。これがあなたのラッキーナンバーです」

「そうですね」

「…」

エルは笑顔で黙っていた。が、

「雄二さん、僕のこと少しでも信じました？」

「え？まあ当たってる部分もあるし…」

「ふふ…雄二さん、占いなんて、嘘ですよ」

「？」

「嘘なんですよ。すべてね。ハッターです」

「??？」

雄二はよく分からなかった。

「あなたの車、バンパーが凹んでいたでしょう？しかもあれは最近の傷だ。あれを見て最近不幸があったのでは？ってハツタリをかましたんですよ」

「…」

「それにあなたは缶コーヒーを箱買いしていた。それを見て金には困つてないと判断した」

「…」

雄二は見透かされたようで、少し悔しかった。

「あと、人間関係について聞いたとき、家族と折り合いがつかなかったりというセリフにあなたは反応して、思わず、そうですねとつぶやいた」

「…」

「それで、まあ兄弟の可能性もあるけど、たぶん親とうまくいつてないのだろうと、そう思ったわけです」

「…」

雄二は言葉も出なかった。

「それにこのサイコロ」

「それが…？」

「だっておかしいでしょ？サイコロの目は1～6までしかない。7・8・9を無視してラッキーナンバー選びなんておかしいですよ」

「まあ…そうですね」

「たぶんあなたは最初から占いなんて信じてないだろうけど、それでも人はちよつとした偶然を見せつけられると信じてしまう」

「確かに…」

「単純なもんなんです。占い師なんて、手品師と一緒にですよ。相手をミスリードする」

「…けど、どうしてこんなことを？」

「俺はね、占い師が嫌いなんです」

「？」

「まあ、過去にいろいろあってね」

「そうですね」

「けど今は幸せですよ。エルっていうのも英語の”ラッキー”の頭文字からとってつけた名前だし」

「じゃあ、時々ここでそうやって、なんていうか…占いの暴露をやってるんですか？」

「ええ。そうです」

「本業は何なんですか？」

「それは秘密です」

「そうですね」

「けど毎回、こういうことやってるわけじゃないんだけどね」

「というと？」

「お金をとって普通に占い師を演じることもあるってこと」

「…」

「人はね、真実を知りたいんじゃない。自分が気持ちよくなりたいだけの生き物なんだよ」

「…」

雄二は妙な説得力に言葉も出なかった。

「ところで…」

雄二は話題を変えた。

「この喫茶店は…むかし経営してたんですか？」

「親がね」

「親御さんが？」

「正確に言うと父親だけだね。8年前までこの二階で二人で暮らしていたんだ。けど…」

「？」

「自殺したんだ」

「！」

「生命保険に入ってたから、けっこうあった借金は返せたけどね」

「そう…ですか。お気の毒に」

「俺がもう少し早く成功していればな…」

「…」

「おっと暗い話はやめよう。人生は前向きが一番」

「そうですね…」

「けどさ、誕生日を聞いたときはさすがに驚いたよ。まさか同じだったとはね」

「そうですね。それは僕も驚きました」

「これも何かの縁かもね。偶然だけど、人生つてのは偶然の積み重ねだからね」

「…」

雄二はエルの核心をつくかのような、それでいてさらっと流す言
い方に心地よさを感じていた。

「ところでさ、俺っていくつに見える？」

突然エルが聞いた。

「え？そうですね…僕は28ですけど…同じくらいかなあ」

「まただ…。俺は今年で38なんだよね…。そんなに童顔なのかなあ」

「ホントですか？全然見えないですよ」

「うゝん…まあいいけどさ」

「若く見られるのは、いいことですよ」

「まあねえ…」

エルは少し不服そうだった。

「まあいいや。まっ、気がむいたらまた来てよ。コーヒーくらいなら出せるから」

「ありがとうございます」

雄二は店を出た。

エルが占い師を嫌いな理由。それは父親の自殺と関係していた。そもそも父親が喫茶店を始めたのは、ある占い師の助言が元になっていた。当時エルの父はその占い師に心酔しており、ほとんど言いなりになっている部分があった。こういうものを置けば客は来る、

こういうものを身につければ運氣が上がる、などなど…。しかし結局、店は繁盛せず自殺。

エルは現在、ひとりで暮らし、ある仕事をしながら気楽に生きていた。

「もしもし。お疲れ様です。あと一週間もあれば終わります。はい。はい。では失礼します」

電話を切るエル。雄二が彼の本業を知ることはないが、彼の本業についてはいずれお話しよう。

ようやく営業を再開したオーケイ弁当。

しかし当然だが、あの日曜大工センターからはもう注文は来なくなった。代わりに注文を受けるようになったのは…もちろん王将弁当。

「くそ…王将弁当め」

雄二は悔しかった。しかし済んだことは仕方ない。今日もはりきって働くしかない。

「さてと…」

いつものように配達ルートを確認する雄二。

「ん？」

ふと、ある伝票に目が止まった。配達ルートの中に先日スーパーで出会ったヒカリハイツの女性から注文があったのだ。

「おお！」

雄二は少し喜んだ

「牧野さんっていうのか…」

しかし彼女は人妻である。どうしようもない。とはいえ男は美人が好きだ。喜ぶのも無理はない。女性には理解できないかもしれないが。

「よし！いいっつー！」

雄二は車に乗り込んだ。

配達先を順調に回り、ヒカリハイツの前に着いた。注文はランチ

定食と名付けられた弁当がひとつ。プラスチックの入れ物で翌日に回収作業もある。

「さてと…えと…203か…」

雄二は階段を上り、玄関に着いた。少し緊張していた。

”ピンポン”

「まいどうも。オーケー弁当です」

いつもより少し大きい声で名乗る雄二。

「あ、はい。ちょっと待ってください」

「はい」

”ガチャ”

「まいどうも」

「あ、どうも。先日はご迷惑をおかけしました」

「いえいえ、そんな」

雄二は笑顔だった。

「じゃあ、これで」

女性は千円札を渡した。

「はい。じゃあこれお釣り400円です」

雄二はお釣りを渡した。

（ん？）

よく見ると、手や顔にあざがあった。この間と同様に包帯もしてある。

「それにしても今日はいい天気ですね」

「そうですね。お出かけ日和ですね」

「仕事さぼって、どこ行きたいくらいです」

「ふふ、分かります」

「まあ車に乗る仕事だから、事務仕事とかよりは気分は晴れますけどね」

「そうですね」

その時

「おいレミ！弁当まだかよ！」

奥から男の声がした。

「あ、今持っていくわ」

女性の顔がこわばった。

「ごめんなさい。これ主人のお弁当なの。早くいかなくちゃ」

「そ、そうですか。すいません、僕の方こそ」

「じゃあ、器は玄関先に置いておきますから」

「はい。明日取りに来ますね」

「おい！早くしろよ！」

再び男の声がした。

「はい！」

旦那は怒っているようだった。

「では失礼します」

「ご苦勞様でした」

雄二は外に出た。

「……」

雄二は思った。あのあざはいわゆるDVによるものではないのか。雄二は少し心配だったが今は仕事中である。心配する気持ちをかかえながら次の配達先へと車を走らせた。

翌日。

昼の3時前後はほとんど注文のない時間なので、器の回収作業がある。雄二は自分が担当する地域の器の回収作業に出ていた。

「さてと」

次に向かうのは例のヒカリハイツ。車を止め、入口の方へ向かうと玄関先に器が置いてあった。

「……」

雄二は少し気になりつつも器を取り、車に戻ろうとした。その時、
「ばかやろう！」

”ガシャン”

大声と、何かが割れる音が聞こえてきた。

「ごめんなさい！」

そしてあの女性の声が聞こえてきた。

「!？」

雄二はあせった。喧嘩だろうか。しかしわざわざ自分が首を突っ込むわけにもいかない。助けを求められているわけじゃないし、お前には関係ないと言われるのがオチだ。

「……」

しばらく立ち尽くしたが、その後は大声や物音はしなかった。

「……」

雄二はものすごく気になりつつも、仕事に戻った。その後も雄二は仕事に集中できなかったが、なんとか仕事を終え、帰宅することにした。

その帰り道、

「ん？」

ふと暗い公園に人影が見えた。あの女性、牧野レミだった。

「!」

雄二は車を止め、レミのもとへと向かった。

「あの…こんばんは」

「!？」

「あの……」

「ああ…あなたはオーケー弁当の……」

「はい。名前は木ノ本雄二といいます」

「こんばんは、木ノ本さん」

「こんばんは」

レミは元気がなかった。目のあたりに痛々しい青あざがあった。散歩ですか？」

「ええ…まあ……」

「あの…そのあざ……」

「……」

雄二は心配だったので聞いてみることにした。

「あの…余計なお世話かもしれませんが…もしかして…」

「だ、旦那さんに…殴られたとか…？」

「…」

レミはうつむいた。

「すいません。大して知り合いでもないのに」

「いえ…そうなんです。私、おつちよこちよいだから、よく怒られるんです」

「そんな…いくらミスがなくても女性を殴るなんて…」

「相談所みたいな所に行った方がいいんじゃないですか？」

「いえ。私が悪いんだし…」

「そんな…」

「木ノ本さんは独身なんですか？」

レミは話題を変えたかった。

「え？はい。安月給だし、僕なんて誰も相手にしてくれません」
雄二はおどけてみせた。

「そんなことないですよ。木ノ本さん優しそうですし、今は不況でみんな収入少ないし」

「いえいえ。僕なんてほんと駄目ですよ、ははは…」

レミは雄二を見ていた。柔らかい微笑みに雄二は吸い込まれそうだった。

「あ、ところでお名前レミって言うんですね」

「え？ええ」

「いい名前ですね。あなたにピッタリですよ」

「ありがとう」

「あ、けど大丈夫ですか？こんなところにいて。こんな時間にどこうろついてるって言われるんじゃない？」

「今日は、あの人夜勤だから大丈夫です」

「そうですか。なら安心です」

「雄二さん、喉かわいてません？」

「え？」

「ジュースでもどうですか？おごりますよ」

「あ、いえいえ、そんなお客さんにおごってもらうなんて」

「大丈夫。実はね、主人にも内緒なんですけど、ほら宝くじあるじゃないですか？」

「宝くじ？」

「あのスクラッチっていう削るやつ。実は今日1万円当たっちゃって」

「そうなんですか？」

「だからおごります」

「でも……」

レミは半ば強引に近くにある自動販売機にお金を入れ出した。

「……」

レミはジュースを2本買い、1本雄二に渡した。

「す、すいません」

「いいんですよ。私のこと心配してくれたし」

「そりゃあ……」

雄二はレミの優しさに惹かれていた。

その後、30分ほど世間話をした。どうやらレミには子供はいないらしい。雄二は出来る限り明るく振舞った。レミも楽しそうだった。

「じゃあ、そろそろ行きますね」

「ええ」

「ジュースありがとうございます」

「いえいえ」

「あ……よかったら送りましたか？夜だし……」

「ありがとう。けどご近所さんに見られたら誤解されるし」

「そ、そうですね。すいません」

「木ノ本さんもお気をつけて」

「はい」

「それじゃあ」

レミは背中を向け去ろうとした。

「……」

雄二はそのか細い背中を見ていた。そして、耐え切れず、やってはいけない行動に出てしまった。

「！」

雄二はレミを後ろから優しく抱きしめてしまった。

「……」

時間が止まったかのような瞬間だった。

二人以外に人は誰もいなかった。まるでそう仕向けたかのように二人だけの空間だった。

「……」

レミは少しだけ驚いたが、けして振り払おうとはしなかった。

「レミさん……」

雄二は名前を呼んだ。

「……」

レミは黙っていた。

「どうして……振り払わないんです？」

雄二は聞いた。

「……どうしてだと思っ？」

レミは聞き返した。

「……」

雄二は答えられなかった。雄二はこのままレミをこちらに向けキスをしようと思った。がしかし、相手は人妻である。まだ雄二にはそこまで出来る勇氣はなかった。

やがて雄二はレミから少し離れた。

「おやすみなさい」

雄二は足早に去った。

「……」

レミは走り去る雄二を横目で見た。そして静かに帰っていった。

数日後。

雄二は仕事の帰り際、また事務所の前に停まるベントンをみつけた。

「あいつ……また来てるのか？」

前は外でこっそり話を聞いていた雄二だが、今日は思い切って事務所に入ってみた。

「栄一さん、お疲れっす」

「雄二……お疲れさん」

栄一は少し驚いた。

「清水さん、あなたしつこいですよ。何度来たって同じです。ねえ栄一さん」

「ああ、もちろんだ。清水さん、お引き取りください」

「ふう……」

清水はため息をついた。

「岡村さん、何度も言うようですがうちの商品は品質も良く値段も安い。だがうちも商売だから配達の地域は拡大をしなければならぬい。となると、いずれはあなたの店を廃業に追い込むことになるかもしれない。だから……」

「分かっていますよ。もし王将弁当のせいでうちが潰れても別に恨みはしません。商売なんですから。うちだって独自にいろいろ頑張っているんだ。人の助けはいりません」

栄一は強気だった。長年やってきた自負があるのだ。

「そうです。それにうちのからあげ弁当だけはあなたの所には勝つてますよ。いや、からあげ弁当に関しては日本一かもしれませんね」

雄二が言い放った。

「……」

清水はあまり相手にしていないようだった。

「分かりました。後悔しても知りませんよ」

清水は事務所から出た。

「まったく…雄二、ありがとな」

「いえいえ」

「疲れたろ？帰ってゆっくりしてくれ」

「はい。おつかれさまでした」

栄一はうんざりといった感じだった。

雄二は事務所から出て、今まさに車を出そうとしてる清水の元へと近寄った。

「清水さん」

雄二は呼び止めた。車の窓は開いていた。

「なんだね？」

「…」

雄二は迷ったが、少し問い詰めてみようと思った。

「清水さん、あんただろ？」

「なにがだ？」

「俺は見たんだ。あんたが変なおっさんに金を渡しているところ」

「！？」

「あんたが雇ったんだろ？あのにせホームレス」

「…」

清水は真顔になった。が、すぐに微笑した。

「証拠でもあるのかね？」

「証拠はない。だから何もできないけど…そんな卑怯なことはいでくれよ」

「…」

「今度なにかあったら、その時は必ず証拠をつかんで法廷で戦うよ」

雄二はハツタリをかました。

「ふふふ…勇ましいな」

「…」

「まあ、仕事頑張りたまえ。それじゃ」

清水は去っていった。

ハツタリとはいえ、今度なにかあつたら絶対許さない。その思いは本気だった。

つづく

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9337t/>

結論は殺人 その2

2011年6月9日00時06分発行